

7 A 重要な定理の証明

この付録では第7章の重要な定理の証明をします。その中心は表現行列についての大直交性定理です。証明の進め方はWignerの本(2頁に引用)に従っていて、少し冗長ですが、現在の標準的教科書のものと異なるので、かえって面白いかも、と考えました。

=====

[表現のユニタリー化の定理]

有限群の表現は相似変換によってユニタリー表現にすることが出来るので、一般に有限群の表現の議論をする時にはそれがユニタリー行列であると考えてよい。

=====

[証明]

有限群 $G = \{G_1, G_2, \dots\}$ の表現行列 $\{\mathbf{D}(G_1), \mathbf{D}(G_2), \dots\}$ がユニタリーでないとし、今1つの行列

$$\mathbf{A} = \sum_G \mathbf{D}(G) \mathbf{D}^\dagger(G) \quad (7A.1)$$

を作ります。 \mathbf{D}^\dagger は \mathbf{D} のエルミート共役(転置して*をとった)行列です。

$$\mathbf{A}^\dagger = \sum_G [\mathbf{D}(G) \mathbf{D}^\dagger(G)]^\dagger = \sum_G [\mathbf{D}^\dagger(G)]^\dagger \mathbf{D}^\dagger(G) = \mathbf{A}$$

だから \mathbf{A} はエルミート行列です。5.9の定理によれば、エルミート行列 \mathbf{A} はユニタリー行列 \mathbf{X} で実数を対角要素とする対角行列 Λ に変換することが出来ます：

$$\mathbf{X}^{-1} \mathbf{A} \mathbf{X} = \Lambda \quad (7A.2)$$

$\mathbf{X}^{-1} = \mathbf{X}^\dagger$ に注意すると、上の式から

$$\mathbf{A} = \sum_G \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{X} \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}^\dagger(G) \mathbf{X} = \sum_G [\mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{X}] [\mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{X}]^\dagger$$

ここで

$$\mathbf{F}(G) = \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{X} \quad (7A.3)$$

と置くと、 $\{\mathbf{F}(G)\}$ は $\{\mathbf{D}(G)\}$ と同値の、群 G の表現になっています。何故なら、 G の元 G, G', G'' の関係が

$$GG' = G''$$

であると、それに対応して

$$\begin{aligned} \mathbf{F}(G) \mathbf{F}(G') &= \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{X} \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G') \mathbf{X} \\ &= \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{D}(G') \mathbf{X} = \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G'') \mathbf{X} = \mathbf{F}(G'') \end{aligned}$$

この $\mathbf{F}(G)$ を使えば

$$\Lambda = \sum_G \mathbf{F}(G) \mathbf{F}^\dagger(G) \quad (7A.4)$$

対角行列 Λ の任意の対角要素 (kk) を具体的に書けば

$$[\Lambda]_{kk} = \sum_G \sum_l [\mathbf{F}(G)]_{kl} [\mathbf{F}^\dagger(G)]_{lk} = \sum_G \sum_l [\mathbf{F}(G)]_{kl} [\mathbf{F}(G)]_{kl}^*$$

だから、これは一般にゼロでない正の実数になると考えてよい、つまり、

$$\Lambda = \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & 0 & \cdots & \cdots \\ 0 & \lambda_2 & 0 & & \\ 0 & 0 & \lambda_3 & & \\ \vdots & & & \ddots & \\ \vdots & & & & \ddots \end{pmatrix}$$

で $\lambda_k > 0$ ですから, 次の2つの対角行列

$$\Lambda^{1/2} = \begin{pmatrix} \sqrt{\lambda_1} & & & & \\ & \sqrt{\lambda_2} & & & \\ & & \ddots & & \\ & & & \sqrt{\lambda_k} & \\ & & & & \ddots \end{pmatrix}, \quad \Lambda^{-1/2} = \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{\lambda_1}} & & & & \\ & \frac{1}{\sqrt{\lambda_2}} & & & \\ & & \ddots & & \\ & & & \frac{1}{\sqrt{\lambda_k}} & \\ & & & & \ddots \end{pmatrix} \quad (7A.5)$$

を定義することが出来ます。 $\Lambda^{1/2}$ と $\Lambda^{-1/2}$ については

$$\Lambda^{1/2} \Lambda^{1/2} = \Lambda, \quad \Lambda^{-1/2} \Lambda \Lambda^{-1/2} = \mathbf{E}, \quad (\Lambda^{1/2})^\dagger = \Lambda^{1/2}, \quad (\Lambda^{-1/2})^\dagger = \Lambda^{-1/2}$$

などの性質があることを確かめて下さい。

次に

$$\mathbf{K}(G) = \Lambda^{-1/2} \mathbf{F}(G) \Lambda^{1/2} \quad (7A.6)$$

を定義すると $\{\mathbf{K}(G)\}$ も $\{\mathbf{D}(G)\}, \{\mathbf{F}(G)\}$ と同じように群 G の行列表現になっていることはすぐに確かめられます。この $\mathbf{K}(G)$ がエルミート行列であることを証明するためには

$$\mathbf{K}(G) \mathbf{K}^\dagger(G) = \mathbf{E} \quad (\mathbf{E} \text{ は単位行列}) \quad (7A.7)$$

であることを示せばよいわけです。

$$\mathbf{K}^\dagger(G) = [\Lambda^{-1/2} \mathbf{F}(G) \Lambda^{1/2}]^\dagger = (\Lambda^{1/2})^\dagger \mathbf{F}^\dagger(G) (\Lambda^{-1/2})^\dagger = \Lambda^{1/2} \mathbf{F}^\dagger(G) \Lambda^{-1/2}$$

ですから, (7A.4) を使うと

$$\begin{aligned} \mathbf{K}(G) \mathbf{K}^\dagger(G) &= \Lambda^{-1/2} \mathbf{F}(G) \Lambda^{1/2} \Lambda^{1/2} \mathbf{F}^\dagger(G) \Lambda^{-1/2} = \Lambda^{-1/2} \mathbf{F}(G) \Lambda \mathbf{F}^\dagger(G) \Lambda^{-1/2} \\ &= \Lambda^{-1/2} \mathbf{F}(G) \sum_G \mathbf{F}(G) \mathbf{F}^\dagger(G) \mathbf{F}^\dagger(G) \Lambda^{-1/2} \\ &= \Lambda^{-1/2} \sum_G \mathbf{F}(G) \mathbf{F}(G) \mathbf{F}^\dagger(G) \mathbf{F}^\dagger(G) \Lambda^{-1/2} \\ &= \Lambda^{-1/2} \sum_G [\mathbf{F}(G) \mathbf{F}(G)] [\mathbf{F}(G) \mathbf{F}(G)]^\dagger \Lambda^{-1/2} \\ &= \Lambda^{-1/2} \sum_G \mathbf{F}(GG) \mathbf{F}(GG) \Lambda^{-1/2} \end{aligned}$$

ここで G についての和は G のすべての元についての和ですから

$$\sum_G \mathbf{F}(GG) \mathbf{F}^\dagger(GG) = \sum_G \mathbf{F}(G) \mathbf{F}^\dagger(G) = \Lambda$$

したがって

$$\mathbf{K}(G)\mathbf{K}^\dagger(G) = \Lambda^{-1/2} \Lambda \Lambda^{-1/2} = \mathbf{E}$$

となって (7A.7) の証明が出来ました。(7A.3) から

$$\begin{aligned} \mathbf{K}(G) &= \Lambda^{-1/2} \mathbf{F}(G) \Lambda^{1/2} = \Lambda^{-1/2} \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{X} \Lambda^{1/2} \\ &= (\mathbf{X} \Lambda^{1/2})^{-1} \mathbf{D}(G) (\mathbf{X} \Lambda^{1/2}) \end{aligned} \quad (7A.8)$$

こうしてエルミート行列 $\mathbf{K}(G)$ が出発点の非エルミート行列 $\mathbf{D}(G)$ から 1 つの相似変換によって得られることが示されました。ちなみに、 $(\mathbf{X} \Lambda^{1/2})$ は一般にユニタリ行列ではありません。また、 $\Lambda^{1/2} \Lambda^{-1/2}$ で行列の平方根が定義されたわけではなく、(7A.5) で定義された行列を表わす便利な記号と思って下さい。(証明終り)

次にシュールの補助定理 (Shur's lemmas) と呼ばれる 2 つの定理を証明します。番号の付け方が逆になっている本もあります。

=====

[シュールの補助定理 (1)]

有限群 G の 1 つの既約表現 $\{\mathbf{D}(G)\} = \{\mathbf{D}(G_1), \mathbf{D}(G_2), \dots\}$ のすべての行列と可換な行列は単位行列 \mathbf{E} に 1 つの定数 λ (複素数を含む) をかけた $\lambda \mathbf{E}$ の形をしている。つまり

$$\mathbf{D}(G)\mathbf{A} = \mathbf{A}\mathbf{D}(G) \quad G \quad G \quad (7A.9)$$

であるとき

$$\mathbf{A} = \lambda \mathbf{E} = \begin{pmatrix} \lambda & 0 & & 0 \\ 0 & \lambda & & \\ & & \ddots & \\ 0 & & & \lambda \end{pmatrix} \quad (7A.10)$$

=====

[証明]

まず (7A.9) を満たす \mathbf{A} があるとして、それを適当な行列 \mathbf{X} で対角化した対角行列を

$$\mathbf{B} = \mathbf{X}^{-1} \mathbf{A} \mathbf{X}$$

とし、同じ \mathbf{X} を使って新しい行列のセット $\{\mathbf{D}(G)\}$:

$$\mathbf{D}(G) = \mathbf{X}^{-1} \mathbf{D}(G) \mathbf{X} \quad G \quad G \quad (7A.11)$$

を定義すると $\{\mathbf{D}(G)\}$ も G の表現になっていますが、(7A.9)、(7A.11) を使って

$$\mathbf{D}(G)\mathbf{B} - \mathbf{B}\mathbf{D}(G) = \mathbf{X}^{-1} [\mathbf{D}(G)\mathbf{A} - \mathbf{A}\mathbf{D}(G)] \mathbf{X}$$

そこで、もし、 $\mathbf{D}(G)\mathbf{A} = \mathbf{A}\mathbf{D}(G)$ であれば

$$\mathbf{D}(G)\mathbf{B} - \mathbf{B}\mathbf{D}(G) = \mathbf{0} \quad (7A.12)$$

つまり、 \mathbf{B} は $\mathbf{D}(G)$ と可換です。この式の両辺の (i, j) 要素を具体的に書くと

$$\sum_{k=1}^d [D_{ik}(G)B_{kj} - B_{ik}D_{kj}(G)] = 0 \quad i, j = 1, 2, \dots, d \quad (7A.13)$$

d は $\mathbf{D}(G)$ の次元です。ところで \mathbf{B} は対角行列だから

$$k \neq j \text{ なら } B_{kj} = 0, \quad k \neq i \text{ なら } B_{ik} = 0$$

したがって、(7A.13) の和はただ 1 項だけが残って、

$$D_{ij}(G)B_{jj} - B_{ii}D_{ij}(G) = 0$$

つまり

$$D_{ij}(G)(B_{jj} - B_{ii}) = 0 \quad i, j = 1, 2, \dots, d \quad (7A.14)$$

となります。そこで、もし多くの (i, j) の組について

$$B_{jj} - B_{ii} = 0$$

となれば、多くの $D_{ij}(G)$ がゼロになり、(7A.11) から考えて $\mathbf{D}(G)$ が可約になる(簡約される)可能性が大きくなります。その可能性が最も少ない場合として、例えば、対角行列 \mathbf{B} の対角要素のうち B_{11} だけが異なり、他はすべて等しい場合：

$$B_{11} = B_{22} = B_{33} = \dots = B_{dd}$$

を考えてみると、(7A.14) から

$$D_{1j}(G)(B_{jj} - B_{11}) = 0 \quad j = 2, 3, \dots, d$$

$$D_{i1}(G)(B_{11} - B_{ii}) = 0 \quad i = 2, 3, \dots, d$$

したがって、

$$D_{1j}(G) = 0 \quad j = 2, 3, \dots, d$$

$$D_{i1}(G) = 0 \quad i = 2, 3, \dots, d$$

が結論できます。つまり表現行列 $\mathbf{D}(G)$ の $D_{11}(G)$ を除いた第1行と第1列の要素のすべてがゼロになり、これはもとの表現行列 $\mathbf{D}(G)$ が(7A.11)の変換で簡約されて、1つの1次元表現が得られたことを意味します。しかし、これは $\mathbf{D}(G)$ は既約として出発したと矛盾しますから、結局、対角行列 \mathbf{B} の対角要素はすべて等しくなければならないことが結論できます：

$$B_{11} = B_{22} = B_{33} = \dots = B_{dd} = \lambda$$

$$\mathbf{B} = \lambda \mathbf{E}$$

したがって

$$\mathbf{A} = \lambda \mathbf{X} \mathbf{E} \mathbf{X}^{-1} = \lambda \mathbf{E}$$

これで(7A.10)が証明できました。 \mathbf{B} の対角要素の B_{11} ではなく B_{kk} が1つだけ他と異なるとしても同じことで、表現の基底の順序をかえれば B_{kk} を B_{11} の位置に持ってこれます。(証明終り)

=====

[シュールの補助定理(2)]

有限群 G の2つの異なる既約表現 α, β の表現行列 $\{\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)\}$ (次元 d_α) , $\{\mathbf{D}^{(\beta)}(G)\}$ (次元 d_β) について、もし1つの(一般には矩形)行列 \mathbf{A} が存在し

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)\mathbf{A} = \mathbf{A}\mathbf{D}^{(\beta)}(G) \quad G \in G \quad (7A.15)$$

であるとすると

(a) もし $d_\alpha = d_\beta$ ならば、 $\det(\mathbf{A}) \neq 0$ で、2つの表現 α, β は等価であるか、さもなければ、

$$\mathbf{A} = \mathbf{0}$$

(b) もし $d_\alpha \neq d_\beta$ ならば、 $\mathbf{A} = \mathbf{0}$

=====

[証明]

d_α d_β としても一般性を失いません (詳細は後で)。(7A.15) のエルミート共役をとると

$$\mathbf{A}^\dagger [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^\dagger = [\mathbf{D}^{(\beta)}(G)]^\dagger \mathbf{A}^\dagger$$

表現行列 $\mathbf{D}^{(\alpha)}(G), \mathbf{D}^{(\beta)}(G)$ はユニタリー化の定理からユニタリー行列と考えてよしい。まず, 一般に $[\mathbf{D}(G)]^{-1} = \mathbf{D}(G^{-1})$ ですから, ユニタリー行列ならば $[\mathbf{D}(G)]^\dagger = \mathbf{D}(G^{-1})$, したがって

$$\mathbf{A}^\dagger \mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) = \mathbf{D}^{(\beta)}(G^{-1}) \mathbf{A}^\dagger$$

左から両辺に \mathbf{A} を掛けると

$$\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger \mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) = \mathbf{A} \mathbf{D}^{(\beta)}(G^{-1}) \mathbf{A}^\dagger \quad (7A.16)$$

ところで (7A.15) は G のすべての要素についての式だから

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) \mathbf{A} = \mathbf{A} \mathbf{D}^{(\beta)}(G^{-1}) \quad G \quad G$$

としても同じことなので, この式に右から \mathbf{A}^\dagger を掛けると

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) \mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger = \mathbf{A} \mathbf{D}^{(\beta)}(G^{-1}) \mathbf{A}^\dagger$$

この式の右辺は (7A.16) の右辺と同じだから

$$\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger \mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) = \mathbf{D}^{(\beta)}(G^{-1}) \mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger$$

したがって, シュールの補助定理(1) から

$$\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger = \lambda \mathbf{E}$$

これで \mathbf{A} の性質が大分はっきりしてきました。そこで

(a) もし, $d_\alpha = d_\beta$ ならば, \mathbf{A} も $\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger$ も正方行列であり, $\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger$ の行列式を計算すると, (4.3.10) から

$$\det(\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger) = \det(\lambda \mathbf{E}) = \lambda^{d_\alpha}$$

ここで

$$\det(\mathbf{A}^\dagger) = [\det(\mathbf{A}^T)]^* = [\det(\mathbf{A})]^*$$

に注意すると, (4.3.9) を使って

$$\begin{aligned} \det(\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger) &= \det(\mathbf{A}) \det(\mathbf{A}^\dagger) = \det(\mathbf{A}) [\det(\mathbf{A}^T)]^* \\ &= \det(\mathbf{A}) [\det(\mathbf{A})]^* = |\det(\mathbf{A})|^2 = \lambda^{d_\alpha} \end{aligned}$$

そこで, $\lambda \neq 0$ の場合と, $\lambda = 0$ の場合を分けて考えます。

$\lambda \neq 0$ ならば, $\det(\mathbf{A}) \neq 0$, したがって \mathbf{A} は逆行列 \mathbf{A}^{-1} を持ち, (7A.15) から

$$\mathbf{A}^{-1} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G) \mathbf{A} = \mathbf{D}^{(\beta)}(G)$$

つまり, 表現 α, β は同値の表現であることが結論できます。

次に, $\lambda = 0$ の場合は $\mathbf{A} \mathbf{A}^\dagger = \mathbf{0}$, これは

$$\sum_{k=1}^{d_\alpha} [\mathbf{A}]_{ik} [\mathbf{A}^\dagger]_{kj} = 0$$

つまり

$$\sum_{k=1}^{d_\alpha} A_{ik} A_{jk}^* = 0 \quad i = 1, 2, \dots, d_\alpha; j = 1, 2, \dots, d_\alpha$$

を意味し, $i = j$ と置くと

$$\prod_{k=1}^{d_\alpha} |A_{ik}|^2 = 0 \quad i = 1, 2, \dots, d_\alpha$$

したがって、すべての $A_{ik} = 0$ 、つまり

$$\mathbf{A} = \mathbf{0}$$

(b) もし $d_\alpha < d_\beta$ ならば、 \mathbf{A} は横長の矩形行列ですが、この \mathbf{A} に $(d_\beta - d_\alpha)$ 行のゼロの並びを付け加えて、正方行列 \mathbf{B} を作ります。具体的に \mathbf{B} の形をかけば、すぐにわかりますが

$$\mathbf{B}\mathbf{B}^\dagger = \mathbf{A}\mathbf{A}^\dagger \quad \text{そして} \quad \det(\mathbf{B}\mathbf{B}^\dagger) = |\det(\mathbf{B})|^2 = 0$$

したがって、この場合も、 $\det(\mathbf{A}\mathbf{A}^\dagger) = 0$ であり、一方、前と同じように

$$\det(\mathbf{A}\mathbf{A}^\dagger) = \det(\lambda \mathbf{E}) = \lambda^{d_\alpha}$$

ですから、 $\lambda = 0$ が結論され、したがって

$$\mathbf{A} = \mathbf{0}$$

以上で証明はほぼ終わったのですが、(b) で $d_\alpha < d_\beta$ と仮定したので、この点を調べます。

[$d_\alpha > d_\beta$ の場合について]

$\mathbf{G} = \{G_1, G_2, \dots\}$ の既約表現 $\{\mathbf{D}(G_1), \mathbf{D}(G_2), \dots\}$ があるとして、各行列を転置した行列の集合が、また、 \mathbf{G} の表現になるかどうかを考えます。 $G_i G_j = G_l$ とすると $\mathbf{D}(G)$ については

$$\mathbf{D}(G_i)\mathbf{D}(G_j) = \mathbf{D}(G_i G_j) = \mathbf{D}(G_l)$$

ですが、転置行列については

$$[\mathbf{D}(G_i)]^T [\mathbf{D}(G_j)]^T = [\mathbf{D}(G_j)\mathbf{D}(G_i)]^T = [\mathbf{D}(G_j G_i)]^T$$

となるので、逆表現的になってしまいます。しかし、 $[\mathbf{D}(G_i^{-1})]^T$ をとってみると

$$\begin{aligned} [\mathbf{D}(G_i^{-1})]^T [\mathbf{D}(G_j^{-1})]^T &= [\mathbf{D}(G_j^{-1})\mathbf{D}(G_i^{-1})]^T = [\mathbf{D}(G_j^{-1} G_i^{-1})]^T \\ &= \mathbf{D}((G_i G_j)^{-1})^T \end{aligned}$$

とうまく行くので、

$$\left\{ [\mathbf{D}(G_i^{-1})]^T \right\} \quad G_i \quad \mathbf{G}$$

が \mathbf{G} の表現になっていることがわかります。この表現が \mathbf{G} の既約表現になっていることは次のように確かめられます。指標は転置しても変わらないので

$$\chi([\mathbf{D}(G^{-1})]^T) = \chi(\mathbf{D}(G^{-1})) \quad G \in \mathbf{G}$$

そして、 \mathbf{G} に属するすべての G についての和をとれば

$$\sum_G |\chi(\mathbf{D}(G^{-1}))|^2 = \sum_G |\chi(\mathbf{D}(G))|^2$$

したがって、 $\{\mathbf{D}(G)\}$ が既約表現ならば、(7.1.16) から $\{[\mathbf{D}(G^{-1})]^T\}$ も既約表現です。ですから、もし

(7A.15) で $d_\alpha > d_\beta$ であれば、両辺を転置して

$$[\mathbf{D}^{(\beta)}(G)]^T \mathbf{A}^T = \mathbf{A}^T [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^T \quad G \in \mathbf{G}$$

として、行列 $\mathbf{A}^T, [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^T, [\mathbf{D}^{(\beta)}(G)]^T$ について、前と同じ議論をすればよいわけで、結局、 $\mathbf{A}^T = \mathbf{0}$ 、したがって、 $\mathbf{A} = \mathbf{0}$ などの結論が得られます。(証明終了)

[表現行列についての大直交性定理の証明]

これから本書の第7章の(7.1.4a)と(7.1.4b)の証明に取りかかります。長くても一步一步のステップはむつかしくありません。まず次の行列 \mathbf{A} を定義します：

$$\mathbf{A} = \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(S^{-1})} \mathbf{X} \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(S)}$$

$\mathbf{D}^{(\alpha)}(S)$ は群 G の既約表現 α の表現行列で、 S についての和は G の g 個の元すべてについてとります。 $\mathbf{D}^{(\alpha)}$ の次元を d_α とすると、行列 \mathbf{X} は $d_\alpha \times d_\alpha$ の正方行列で、その内容は任意であるとしておきます。この任意性はあとで活用されます。以下の証明の方針は \mathbf{A} が G の任意の元 G について

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)\mathbf{A} = \mathbf{A}\mathbf{D}^{(\alpha)}(G) \quad G \in G$$

であることを確かめて、シュールの補助定理を使うことにあります。ただ、議論を円滑に進める技術的な便宜から、上の式の代わりに、それと同じ内容の表式

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})\mathbf{A} = \mathbf{A}\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1}) \quad T \in G \quad (7A.18)$$

が成立することを確かめることにします。 G のすべての元の逆元をとっているのです、このように書いても同じことです。

(7A.17)の左から $\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})$ を掛けると

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})\mathbf{A} = \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})\mathbf{D}^{(\alpha)}(S^{-1})} \mathbf{X} \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(S)} = \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}((ST)^{-1})} \mathbf{X} \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(S)}$$

右から $\mathbf{D}^{(\alpha)}(T)\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})$ を掛けますが

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(T)\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1}) = \mathbf{D}^{(\alpha)}(TT^{-1}) = \mathbf{D}^{(\alpha)}(E) = \mathbf{E}$$

ですから、右辺の内容を変えているわけではありません。

$$\begin{aligned} \mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})\mathbf{A} &= \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}((ST)^{-1})} \mathbf{X} \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(S)} \mathbf{D}^{(\alpha)}(T)\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1}) \\ &= \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}((ST)^{-1})} \mathbf{X} \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(ST)} \mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1}) \end{aligned}$$

ところで、 S についての和は G の元のすべてについて走るのですから、 T がどの元であろうと

$$\underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}((ST)^{-1})} \mathbf{X} \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(ST)} = \underset{R}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(R^{-1})} \mathbf{X} \underset{R}{\mathbf{D}^{(\alpha)}(R)} = \mathbf{A}$$

となります。これで、(7A.18)が確かめられました。したがって補助定理(1)によれば

$$\mathbf{A} = \lambda \mathbf{E} \quad \text{つまり} \quad A_{jl} = \lambda \delta_{jl} \quad (7A.19)$$

の形をしているはずで、ところで(7A.17)の \mathbf{A} は好きなようにとれる \mathbf{X} を含んでいます。この \mathbf{X} を次のようにとると、 λ が定まり、(7.1.4a)が出てきます！(7A.17)を成分で書けば

$$A_{jl} = \sum_{S, p, q} D_{jp}^{(\alpha)}(S^{-1}) X_{pq} D_{ql}^{(\alpha)}(S)$$

ここで

$$X_{pq} = \delta_{pi} \delta_{iq}$$

つまり, $p = i, q = k$ の時に限って 1 の値をとり, 他の行列要素はすべてゼロであるようにとります。すると, (7A.19) から

$$A_{jl} = \underset{S}{D_{ji}^{(\alpha)}}(S^{-1})D_{kl}^{(\alpha)}(S) = \lambda \delta_{jl} \quad j = 1, 2, \dots, d_\alpha; l = 1, 2, \dots, d_\alpha$$

ここで $j = l$ とすると

$$\lambda = \underset{S}{D_{ji}^{(\alpha)}}(S^{-1})D_{kj}^{(\alpha)}(S) = \underset{S}{D_{kj}^{(\alpha)}}(S)D_{ji}^{(\alpha)}(S^{-1}) \quad j = 1, 2, \dots, d_\alpha$$

この d_α 個の式を縦に並べて加え併せる, つまり, j について両辺の和をとると

$$\begin{aligned} \lambda \underset{j=1}{\overset{d_\alpha}{1}} &= \underset{S}{\overset{d_\alpha}{D_{kj}^{(\alpha)}}(S)D_{ji}^{(\alpha)}(S^{-1})} \\ \lambda d_\alpha &= \underset{S}{D_{ki}^{(\alpha)}}(SS^{-1}) = \underset{S}{D_{ki}^{(\alpha)}}(E) = \underset{S}{\delta_{ki}} = g \delta_{ki} \end{aligned}$$

したがって

$$\lambda = \frac{g}{d_\alpha} \delta_{ki}$$

これで λ が求められたので, 上の A_{jl} の式に戻って

$$\underset{S}{D_{ji}^{(\alpha)}}(S^{-1})D_{kl}^{(\alpha)}(S) = \frac{g}{d_\alpha} \delta_{ik} \delta_{jl} \quad (7A.20)$$

ところで, 前にも使いましたが, 一般に

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) = [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^{-1}$$

であり, さらに, $\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)$ はユニタリー行列ですから

$$[\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^{-1} = [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^\dagger$$

したがって

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) = [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^\dagger$$

これを行列要素で書けば

$$D_{ji}^{(\alpha)}(G^{-1}) = [D_{ij}^{(\alpha)}(G)]^*$$

(7A.20) に入れて, S と G と書き換えれば

$$\underset{G}{[D_{ij}^{(\alpha)}(G)]^*} D_{kl}^{(\alpha)}(G) = \frac{g}{d_\alpha} \delta_{ik} \delta_{jl}$$

となり, (7.1.4a) が得られました。

次に (7.1.4b) の証明に進みます。今度は (7A.17) の代りに

$$\mathbf{A} = \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}}(S^{-1})\mathbf{X}\mathbf{D}^{(\beta)}(S) \quad (7A.21)$$

ととります。 \mathbf{X} は $d_\alpha \times d_\beta$ の任意の矩形行列です。(7A.18) に対応して

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})\mathbf{A} = \mathbf{A}\mathbf{D}^{(\beta)}(T^{-1}) \quad T \mathbf{G} \quad (7A.22)$$

の関係を確立することを目指します。

(7A.21) の左から $\mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})$ を, 右から $\mathbf{D}^{(\beta)}(T)\mathbf{D}^{(\beta)}(T^{-1}) = \mathbf{E}$ を掛けて, (7A.18) の場合と同じように進みます:

$$\begin{aligned} \mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})\mathbf{A} &= \mathbf{D}^{(\alpha)}(T^{-1})\mathbf{A}\mathbf{D}^{(\beta)}(T)\mathbf{D}^{(\beta)}(T^{-1}) \\ &= \underset{S}{\mathbf{D}^{(\alpha)}}\left((ST)^{-1}\right)\underset{S}{\mathbf{X}}\mathbf{D}^{(\beta)}(ST)\mathbf{D}^{(\beta)}(T^{-1}) \\ &= \mathbf{A}\mathbf{D}^{(\beta)}(T^{-1}) \end{aligned}$$

ですから、(7A.22) が確かめられました。シュールの補助定理 (2) によれば、表現 α, β が同値でない表現であるならば

$$\mathbf{A} = \mathbf{0}$$

です。(7A.21) を行列要素について書いた式

$$A_{jl} = \underset{S}{D}_{jp}^{(\alpha)}(S^{-1})X_{pq}D_{ql}^{(\beta)}(S) = 0$$

で、前と同様に $X_{pq} = \delta_{pi}\delta_{iq}$ ととれば

$$\underset{S}{D}_{ji}^{(\alpha)}(S^{-1})D_{kl}^{(\beta)}(S) = 0$$

$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)$ のユニタリー性を使い、 S を G に書き換えれば

$$\underset{G}{[D_{ij}^{(\alpha)}(G)]^*} D_{kl}^{(\beta)}(G) = 0$$

これで (7.1.4b) が証明できました。(証明終り)

[類について]

表現行列の大直交定理の証明はすみましたが、第7章には指標についての直交定理やその他の重要な関係式があり、それらを証明し確認する仕事が残っています。そのためには第2章で導入された「類」の数学的性質の理解を広める必要があります。まずは点群 C_{3v}

$$C_{3v} = \{E, C_3, C_3^2, \sigma_v, \sigma_v, \sigma_v\}$$

を具体例として使います。 C_{3v} は (2.6.5) のように3つの類 (class) に分類されます：

$$C_1 : E \quad g_1 = 1$$

$$C_2 : C_3, C_3^2 \quad g_2 = 2$$

$$C_3 : \sigma_v, \sigma_v, \sigma_v \quad g_3 = 3$$

g_i は類に属する元の数。第2章の部分群について使ったのと同じ意味合いの + 記号を使って上を数学的に表わせば

$$C_1 = E$$

$$C_2 = C_3 + C_3^2$$

$$C_3 = \sigma_v + \sigma_v + \sigma_v$$

と書けます。和のなかに元が現われる順序はどうでもよしい。類の定義から、 C_{3v} の任意の元 G について

$$G^{-1}C_iG = C_i \quad (7A.23)$$

が成り立ちます。例えば

$$\sigma_v^{-1}C_2\sigma_v = \sigma_v^{-1}(C_3 + C_3^2)\sigma_v = C_3^2 + C_3 = C_2$$

(7A.23) が一般に成立する関係であることは類の定義から明らかですが、この関係を

$$C_i G = G C_i \quad (7A.23')$$

と書いて、 C_i は群 G の任意の元 G と可換である、と言いつたことが出来ます。

次に同じ記法の下で 2 つの類の積を定義します。 C_{3V} の例では

$$\begin{aligned} C_1 C_2 &= E(C_3 + C_3^2) = C_3 + C_3^2 = C_2 \\ C_2 C_2 &= (C_3 + C_3^2)(C_3 + C_3^2) = C_3^2 + C_3^3 + C_3^3 + C_3^4 = 2E + C_3^2 + C_3 \\ &= 2C_1 + C_2 \end{aligned}$$

他の組合せも同じように計算すると次の表が得られます。

群 C_{3V} の類の積表

	C_1	C_2	C_3
C_1	C_1	C_2	C_3
C_2	C_2	$2C_1 + C_2$	$2C_3$
C_3	C_3	$2C_3$	$3C_1 + 3C_3$

この表で見ると

$$C_i C_j = C_j C_i \quad (7A.24)$$

つまり、類の間の積は可換ですが、この性質が一般に成立することは (7A.23') の G が C_j に属する元だと考えると直ぐにわかります。

もう 1 つ注目したい性質は、2 つの類の積が

$$C_i C_j = \sum_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} C_p \quad (7A.25)$$

の形になって、右辺は類の 1 次結合として表わされている、つまり、1 つの類に属する元が異なる数係数を持ってばらばらに立ち現われることはないということです。これを一般的に確かめるのは少し手間が掛ります。まず記号を整備します。

群 $G = \{G_1 = E, G_2, G_3, \dots, G_g\}$ は n_c 個の類 C_1, C_2, \dots, C_{n_c}

に分類され、その 1 つ C_p は g_p の元を含むものとします：

$$C_p = G_{p,1} + G_{p,2} + \dots + G_{p,l} + \dots + G_{p,m} + \dots + G_{p,g_p}$$

G の任意の元 G について

$$G^{-1} C_p G = G^{-1} G_{p,1} G + G^{-1} G_{p,2} G + \dots$$

を作ると、各項はすべて異なる元を与えます。それは、もし

$$G^{-1} G_{p,l} G = G^{-1} G_{p,m} G$$

ならば、 $G_{p,l} = G_{p,m}$ であったことを意味するからです。したがって上式の右辺には C_p に属するすべての元が 1 回づつ現われます。このことを

$$G^{-1} C_p G = C_p$$

と書けば、これは (7A.23) が一般的に成り立つことを再確認したことになります。

G の (E ではない) ある元 S について $G_{p,l}$ と $G_{p,m}$ の間に

$$S^{-1}G_{p,l}S = G_{p,m} \quad (7A.26)$$

が成り立つとします。 C_p の任意の2つの元について、この関係が成り立つような S が必ず選べるはずで
す。類の定義を思い出して下さい。さて、積 $C_i C_j$ が

$$C_i C_j = \dots + a_l G_{p,l} + \dots + a_m G_{p,m} + \dots \quad (7A.27)$$

の形で C_p に属する任意の2つの元 $G_{p,l}, G_{p,m}$ を含むとすると、必ず $a_l = a_m$ になることが示されれば、
積 $C_i C_j$ の中に類 C_p の元は共通の係数を持って含まれること、つまり、(7A.25) の形で含まれることが
確認されたこととなります。今からそれを示します。

$G_{p,l}$ と $G_{p,m}$ を (7A.26) のように結ぶ元 S を選び、(7A.27) の両辺の共役をとります。左辺は

$$S^{-1}C_i C_j S = S^{-1}C_i S S^{-1}C_j S = C_i C_j \quad (*)$$

右辺は

$$S^{-1}[r.h.s.]S = \dots + a_l S^{-1}G_{p,l}S + \dots + a_m S^{-1}G_{p,m}S + \dots \quad (**)$$

ここで $S^{-1}G_{p,m}S$ は、類 C_p には属しますが $G_{p,m}$ とは異なる元になります。(*) と (**) は等しい筈で
すから

$$C_i C_j = \dots + a_l G_{p,m} + \dots$$

この式をもとの (7A.27) とくらべると

$$a_l = a_m$$

と結論せざるを得ません。これで (7A.25) が確かめられました。なお、(7A.24) の性質から

$$c_{ij,p} = c_{ji,p}$$

であり、正整数かゼロの値をとります。

この係数のうち、 $C_1 = E$ と約束すると、その係数は重要な性質を持っています。それを見つける話は
少し長くなりますが、あとで大きな利用価値があるので、しばらく辛抱して下さい。

群の定義から

$$G = \{G_1 = E, G_2, \dots, G_g\}$$

は各元の逆元を使って

$$G = \{G_1^{-1} = E, G_2^{-1}, \dots, G_g^{-1}\}$$

と書いてもよろしい。元の並び方が変わるだけで集合としては同じです。例えば

$$\begin{aligned} C_{3v} &= \{E, C_3, C_3^2, \sigma_v, \sigma_v, \sigma_v\} \\ &= \{E^{-1}, [C_3]^{-1}, [C_3^2]^{-1}, [\sigma_v]^{-1}, [\sigma_v]^{-1}, [\sigma_v]^{-1}\} \\ &= \{E, C_3^2, C_3, \sigma_v, \sigma_v, \sigma_v\} \end{aligned}$$

C_{3v} の類の構造は、前出のように

$$C_1 = E$$

$$C_2 = C_3 + C_3^2$$

$$C_3 = \sigma_v + \sigma_v + \sigma_v$$

で与えられますが、各類の元の逆元の集合

$$C_1 = E^{-1}$$

$$C_2 = [C_3]^{-1} + [C_3^2]^{-1}$$

$$C_3 = [\sigma_v]^{-1} + [\sigma_v]^{-1} + [\sigma_v]^{-1}$$

は類になっているでしょうか？実は，類になることを見込んだ記号が使っていますが， C_{3v} の場合には，たしかに

$$C_1 = C_1 \quad C_2 = C_2 \quad C_3 = C_3$$

という簡単な結果になります。しかし，例えば，巡回群 $C_3 = \{E, C_3, C_3^2\}$ の類の構造は

$$C_1 = E \quad C_2 = C_3 \quad C_3 = C_3^2$$

ですから

$$C_1 = E^{-1} = E = C_1$$

$$C_2 = [C_3]^{-1} = C_3^2 = C_3$$

$$C_3 = [C_3^2]^{-1} = C_3 = C_2$$

という結果になり，必ずしも $C_i = C_i$ とはならないことがわかります。次は一般論。ある群 G の1つの類

$$C_p = G_{p,1} + \cdots + G_{p,l} + \cdots + G_{p,m} + \cdots + G_{p,g_p}$$

の逆元の集合

$$C_p = G_{p,1}^{-1} + \cdots + G_{p,l}^{-1} + \cdots + G_{p,m}^{-1} + \cdots + G_{p,g_p}^{-1}$$

が G の類になっていることを確かめます。前述のように， C_p の2つの元 $G_{p,l}, G_{p,m}$ について，群 G の1つの元 S を選んで

$$S^{-1}G_{p,l}S = G_{p,m}$$

とできる筈ですから，この両辺の逆をとって

$$(S^{-1}G_{p,l}S)^{-1} = SG_{p,l}^{-1}S^{-1} = G_{p,m}^{-1}$$

この関係は $G_{p,l}^{-1}$ と $G_{p,m}^{-1}$ が互いに共役であること，つまり，同じ類に属していることを示しています。したがって， C_p が1つの類であれば，その元の逆元の集合 C_p も1つの類をなしていることが結論できます。勿論， C_3 の例でわかるように，必ずしも $C_p = C_p$ とは限りません。

(7A.25) に戻って

$$C_i C_j = \sum_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} C_p = c_{ij,1} C_1 + c_{ij,2} C_2 + \cdots$$

$$C_i = G_{i,1} + G_{i,2} + \cdots + G_{i,g_i}$$

$$C_i = G_{i,1}^{-1} + G_{i,2}^{-1} + \cdots + G_{i,g_i}^{-1}$$

であるとすると，積 $C_i C_j$ の C_i 中の $G_{i,s}$ について考えると，上の $C_i C_j$ の展開式が $C_1 = E$ を含むためには， C_j は $G_{i,s}^{-1}$ を含んでいなければなりません。しかし， $G_{i,s}^{-1}$ を含む類は必然的に C_i の

他の元の逆元も含むことになり， C_j は，実は， C_i でなければなりません。そして， $C_j = C_i$

, つまり, 積 $C_i C_j$ の場合には, $C_1 = E$ が現われる度数は g_i だけありますから

$$c_{ij,1} = \begin{matrix} g_i & (C_j = C_i) \\ 0 & (C_j \neq C_i) \end{matrix} \quad (7A.29)$$

となります。前出の C_{3v} の類の積表でも確かにそうなっています。この一般的結論はやがて大いに役に立ちます。

[正則表現 (regular representation)]

第2章で, 1つの群の積表が与えられれば, その群の数学的性質が規定されることを学びました。数学者はこの積表を以下のように改作して, そこから面白い表現行列を読み取ってきて, 正則表現と名付け, それを巧みに利用して, (7.1.5) などの重要な結論を引き出して来ます。

$$G = \{G_1 = E, G_2, G_3, \dots, G_g\}$$

という一般の有限群の正則表現を作るための積表は $\{G_1^{-1} = E, G_2^{-1}, G_3^{-1}, \dots, G_g^{-1}\}$ を左端のタテの並びにとって $G_i^{-1} G_j$ の形の積を並べたものです:

$$\begin{matrix} & E & G_2 & G_3 & \dots & \dots & G_g \\ E & E & G_2 & G_3 & & & G_g \\ G_2^{-1} & G_2^{-1} & E & G_2^{-1} G_3 & & & G_2^{-1} G_g \\ G_3^{-1} & G_3^{-1} & G_3^{-1} G_2 & E & & & G_3^{-1} G_g \\ \vdots & & & & & & \vdots \\ \vdots & & & & & & \vdots \\ G_g^{-1} & G_g^{-1} & G_g^{-1} G_2 & G_g^{-1} G_3 & \dots & \dots & E \end{matrix}$$

$G_i^{-1} G_i = E$ だから, 対角線上には E が並びます。

$$C_{3v} = \{E, C_3, C_3^2, \sigma_v, \sigma_v, \sigma_v\}$$

については

$$\begin{matrix} E & C_3 & C_3^2 & \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v \\ E & E & C_3 & C_3^2 & \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v \\ C_3^2 & C_3^2 & E & C_3 & \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v \\ C_3 & C_3 & C_3^2 & E & \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v \\ \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v & E & C_3^2 & C_3 \\ \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v & C_3 & E & C_3^2 \\ \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v & \sigma_v & C_3^2 & C_3 & E \end{matrix}$$

となります。

正則表現行列はこの積表から簡単なルールで作れます。行列の次元は群のそれと同じ g です。 $G_1 = E$ の表現行列は積表で E が現われている所に 1 を置き, 他の要素はすべてゼロにして作り

ます。 C_{3v} の例では

$$\mathbf{D}^{reg}(E) = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

です。\$C_{3V}\$ の \$C_3\$ についても、積表で \$C_3\$ が現われている所には 1、他はゼロを置きます。\$\sigma_v\$ についても同様です：

$$\mathbf{D}^{reg}(C_3) = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \quad \mathbf{D}^{reg}(\sigma_v) = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

一般的に \$\mathbf{G}\$ の 1 つの元 \$G_a\$ の正則表現行列の行列要素の定義は

$$D_{ik}^{reg}(G_a) = \begin{cases} 1 & : G_i^{-1}G_k = G_a \\ 0 & : G_i^{-1}G_k \neq G_a \end{cases} \quad (7A.30)$$

つまり、1 つの行 \$i\$ について、ただ 1 つの \$k\$ の所だけで行列要素の値を 1 に、他はゼロとするのです。1 つの \$G_i^{-1}\$ で、\$k\$ を \$(1, 2, \dots, g)\$ と走らせると、必ず、ある \$k\$ の値で \$G_i^{-1}G_k = G_a\$ となり、その他は \$G_a\$ となりません。あとの計算が見やすいように、\$\mathbf{G}\$ のもう 1 つの元 \$G_b\$ の正則表現行列 \$\mathbf{D}^{reg}(G_b)\$ の \$(kj)\$ 要素も書いておきます。

$$D_{kj}^{reg}(G_b) = \begin{cases} 1 & : G_k^{-1}G_j = G_b \\ 0 & : G_k^{-1}G_j \neq G_b \end{cases} \quad (7A.31)$$

このように定義された行列が群 \$\mathbf{G}\$ の表現行列になっていることを確かめるには

$$\mathbf{D}^{reg}(G_a)\mathbf{D}^{reg}(G_b) = \mathbf{D}^{reg}(G_aG_b) \quad (7A.32)$$

であることを示せばよろしい。右辺の \$(ij)\$ 要素は

$$D_{ij}^{reg}(G_aG_b) = \begin{cases} 1 & : G_i^{-1}G_j = G_aG_b \\ 0 & : G_i^{-1}G_j \neq G_aG_b \end{cases} \quad (7A.33)$$

で、\$i\$ が与えられると、\$D_{ij}^{reg}(G_aG_b) = 1\$ となる \$j\$ の値が 1 つあることを意味しています。左辺の \$(ij)\$ 要素は

$$\sum_{k=1}^g D_{ik}^{reg}(G_a)D_{kj}^{reg}(G_b) \quad (7A.34)$$

ですが、\$i\$ を与えると、\$k\$ のある 1 つの値 \$k\$ についてだけ

$$D_{ik}^{reg}(G_a) = 1 \quad G_i^{-1}G_k = G_a$$

であり、その k については、 j のある 1 つの値 j についてだけ

$$D_{kj}^{reg}(G_b) = 1 \quad G_k^{-1}G_j = G_b$$

となり、その他では (7A.32) の左辺はゼロになります。ゼロでない場合には

$$G_i^{-1}G_k G_k^{-1}G_j = G_i^{-1}G_j = G_a G_b$$

となりますが、これは、 i を与えた時に、 j の 1 つの値 j で $G_i^{-1}G_j = G_a G_b$ が成立し、ここでは (7A.32) の左辺の値が 1 になることが示されたわけですから、結局、(7A.32) の等号が成り立つこと、つまり、 $\mathbf{D}^{reg}(G)$ が群 G の表現行列になっていることが証明されたわけです。

1 つの有限群 G (位数 g) が与えられると、上に説明した処方で、次元 g の正則表現を作ることが出来ますが、 C_{3V} の例からも明らかのように、一般には可約な表現です。そこで、指標の直交性 (7.1.11), (7.1.12) を使って、正則表現が含む既約表現のことを調べてみます。

G の異値既約表現の数を n_r とし、 G の可約表現の指標 $\chi(G)$ が

$$\chi(G) = \sum_{\alpha=1}^{n_r} a_{\alpha} \chi^{(\alpha)}(G)$$

のように簡約されるとすると、

$$a_{\alpha} = \frac{1}{g} \left[\chi^{(\alpha)}(G) \right]^* \chi(G)$$

$\chi(G)$ が正則表現の指標である場合には、その定義から

$$\chi^{reg}(E) = g \quad \text{その他の } G \text{ については} \quad \chi^{reg}(G) = 0$$

ですから、上の和はただ 1 項だけが生き残り、 d_{α} を既約表現 $\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)$ の次元とすると

$$\chi^{(\alpha)}(E) = d_{\alpha}$$

なので、正則表現については

$$a_{\alpha} = \frac{1}{g} \left[\chi^{(\alpha)}(E) \right]^* \chi^{reg}(E) = \frac{1}{g} d_{\alpha} \quad g = d_{\alpha}$$

$$\chi^{reg}(G) = \sum_{\alpha=1}^{n_r} d_{\alpha} \chi^{(\alpha)}(G)$$

となり、これは、正則表現を簡約すると G のすべての既約表現がその次元数に等しい数だけ現われるという面白い事実を告げています。

さらに、 $G = E$ の場合には

$$\chi^{reg}(E) = g = \sum_{\alpha=1}^{n_r} d_{\alpha} \chi^{(\alpha)}(E) = \sum_{\alpha=1}^{n_r} d_{\alpha}^2$$

という結果が得られます。これで (7.1.5) が証明されました。

E を除く他の G については

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} d_{\alpha} \chi^{(\alpha)}(G) = 0$$

です。指標は $C_1 = E$ を含めて類の関数だから、以上の性質をまとめて次のようにも書けます。

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} d_{\alpha} \chi^{(\alpha)}(C_i) = g \delta_{i1} \quad (7A.35)$$

[指標の間の第 2 直交関係の証明]

7.1 で保留した (7.1.8) の証明にはかなりの工夫が必要です。群 G の既約表現 α の表現行列 $\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)$ の、類 C_i に属する元

$$G_{i,1}, G_{i,2}, \dots, G_{i,m}, \dots, G_{i,g_i} \quad (*)$$

についての次のような和を定義します：

$$\mathbf{A}_i^{(\alpha)} = \sum_{m=1}^{g_i} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G_{i,m}) \quad (7A.36)$$

$\mathbf{A}_i^{(\alpha)}$ は類が与えられれば決まる量、いわゆる類関数であり、構造的には、まえに + 記号で集合を表わした類の表式

$$C_i = \sum_{m=1}^{g_i} G_{i,m} \quad (*)$$

と平行して考えられる量であることに注意します。

群 G の任意の元 G について、前出のように

$$G^{-1}C_iG = C_i$$

ですから、(*) のすべてについて和をとること

$$G^{-1}G_{i,1}G, G^{-1}G_{i,2}G, \dots, G^{-1}G_{i,m}G, \dots, G^{-1}G_{i,g_i}G$$

について和をとることとは同じです。それで $\mathbf{A}_i^{(\alpha)}$ を次の形に変形できます：

$$\begin{aligned} \mathbf{A}_i^{(\alpha)} &= \sum_{m=1}^{g_i} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}G_{i,m}G) = \sum_{m=1}^{g_i} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) \mathbf{D}^{(\alpha)}(G_{i,m}) \mathbf{D}^{(\alpha)}(G) \\ &= \mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) \sum_{m=1}^{g_i} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G_{i,m}) \mathbf{D}^{(\alpha)}(G) \end{aligned}$$

ここで $\mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) = [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^{-1}$ に注意すれば

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G) \mathbf{A}_i^{(\alpha)} = \mathbf{A}_i^{(\alpha)} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G)$$

したがってシュールの補助定理 (1) から $\mathbf{A}_i^{(\alpha)}$ は

$$\mathbf{A}_i^{(\alpha)} = \lambda_i^{(\alpha)} \mathbf{E} \quad (7A.37)$$

という形であり、 \mathbf{E} の次元は $\mathbf{D}^{(\alpha)}$ の次元 d_α と同じであることが結論できます。両辺の跡 (trace) をとると、類 C_i の元については $\mathbf{D}^{(\alpha)}(G_{i,m})$ の跡は同じですから

$$g_i \chi^{(\alpha)}(C_i) = \lambda_i^{(\alpha)} d_\alpha$$

となつて、

$$\lambda_i^{(\alpha)} = \frac{g_i}{d_\alpha} \chi^{(\alpha)}(C_i) \quad (7A.38)$$

という結果が得られます。

次に C_i と異なる類 C_j についても (7A.36) の和を定義して

$$\mathbf{A}_i^{(\alpha)} \mathbf{A}_j^{(\alpha)} = \prod_{m=1}^{g_i} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G_{i,m}) \prod_{n=1}^{g_j} \mathbf{D}^{(\alpha)}(G_{j,n})$$

という積を作ると，前の (7A.36) と (**) を付けた式の間類似と同じく，上の式の右辺は $\mathbf{C}_i \mathbf{C}_j$ に平行する積だから

$$\mathbf{C}_i \mathbf{C}_j = \prod_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} \mathbf{C}_p$$

に対応して

$$\mathbf{A}_i^{(\alpha)} \mathbf{A}_j^{(\alpha)} = \prod_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} \mathbf{A}_p^{(\alpha)}$$

が得られます。ここで(7A.37) から得られる

$$\mathbf{A}_i^{(\alpha)} = \lambda_i^{(\alpha)} \mathbf{E} \quad \mathbf{A}_j^{(\alpha)} = \lambda_j^{(\alpha)} \mathbf{E} \quad \mathbf{A}_p^{(\alpha)} = \lambda_p^{(\alpha)} \mathbf{E}$$

を代入すると， \mathbf{E} は次元 d_α の単位行列だから

$$\lambda_i^{(\alpha)} \lambda_j^{(\alpha)} = \prod_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} \lambda_p^{(\alpha)}$$

(7A.38) を代入して

$$\frac{g_i}{d_\alpha} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \frac{g_j}{d_\alpha} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = \prod_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} \frac{g_p}{d_\alpha} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_p)$$

$$g_i g_j \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = \prod_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} g_p d_\alpha \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_p)$$

両辺を α について，つまり \mathbf{G} の既約表現について和をとると

$$g_i g_j \sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = \prod_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} g_p \sum_{\alpha=1}^{n_r} d_\alpha \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_p)$$

右辺の α についての和は (7A.35) の和ですから

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} d_\alpha \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_p) = g \delta_{p1}$$

$$g_i g_j \sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = \prod_{p=1}^{n_c} c_{ij,p} g_p g \delta_{p1}$$

$$= c_{ij,1} g \quad (\because \mathbf{C}_1 = \mathbf{E} \quad g_1 = 1)$$

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = c_{ij,1} \frac{g}{g_i g_j}$$

$c_{ij,1}$ については前に調べてあり，(7A.29) から

$$\mathbf{C}_j = \mathbf{C}_i \quad \text{の時は} \quad c_{ij,1} = g_i$$

ですから，上の式は

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = \frac{g}{g_i} \quad (***)$$

また,

$$\mathbf{C}_j \quad \mathbf{C}_i \quad \text{の時は} \quad c_{ij,1} = 0$$

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = 0$$

しかし, 表式としては,

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j) = 0 \quad \mathbf{C}_i \quad \mathbf{C}_j \quad (****)$$

と書いても内容的には全く同じことです。ところで, $\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)$ のユニタリー性から

$$\mathbf{D}^{(\alpha)}(G^{-1}) = [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^{-1} = [\mathbf{D}^{(\alpha)}(G)]^\dagger$$

転置によって指標は変わらないので, 一般に

$$\chi^{(\alpha)}(G^{-1}) = [\chi^{(\alpha)}(G)]^* \quad \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_p) = [\chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_p)]^*$$

したがって, 式 (***) は

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) [\chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i)]^* = \frac{g}{g_i}$$

式 (****) は

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) [\chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j)]^* = 0$$

と書けます。この両方の式をまとめると

$$\sum_{\alpha=1}^{n_r} \chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_i) [\chi^{(\alpha)}(\mathbf{C}_j)]^* = \frac{g}{g_i} \delta_{ij}$$

この式の複素共役をとれば (7.1.8) が得られます。公式としては複素共役をとらない形でもよいのです。

